
妄想ウサギSIDE

鈴木真心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想ウサギSIDE

【Nコード】

N0180Z

【作者名】

鈴木真心

【あらすじ】

脳内ストックされたまま、途中まで書いて放置、そんなジャンル諸々なお話の数々。
連載にするつもり（だった？）ネタ置き場的な場所であって、短編のつもりは皆無。

短編は自サイトに置いています。

続くかもしれないし続かないかもしれないしわからない。

超不定期投稿。

少年ウサギ・そのいち

僕はウサギ。

耳がついてて尻尾が丸くて白いやつじゃない。

名前がウサギなだけで、生物学上は人間の男だ。

名前の割りには整った顔とさらさらの黒髪だったりする。

僕は喧嘩が嫌いだけれど、何故かいつもふっかけられる。

何故だろうかと何度も考えてみたけれど、そこところはいまいちわからない。

そういう考えているうちに、やっぱりまた、ふっかけられた。

「おい田中、お前いけすかねえんだよ。」

「どうして?」

「ウサギとかいう名前のくせして、眼鏡なんか掛けやがって!」

「目が悪いからね。ああ、君も掛けたいのかな?けど、眼鏡掛けたからって誰でも賢くて美しくなれるわけじゃないんだよ、郷山田くん。」

ああ、郷山田くんが憤慨してしまった。

的を射た的確な発言をただけなのに。

「ふざけんな!」

ひらひ。

突進してきた彼を華麗に避けて、僕は胸ポケットから赤いハンカチを取り出す。

喧嘩は嫌いだ。

だから僕は、決して闘わない。

避けて避けて避けまくる。

闘牛士の如く、赤いハンカチをひらひらとさせながら。

「君はがさつだなあ。美しくないよ。ああ今のは見た目のことじゃないからね。」

「う、うるせえ！ハンカチなんかで闘いやがって！だからいけすかねえんだよ！」

「どうしてわからないのかな。」

ひらり。

赤い色に興奮気味の彼を挑発し、僕はまた華麗に避けて見せる。

ああ虚しい。

お師匠様は、こんなことのために僕にハンカチ技を教えたわけではないというのに。

切なさに胸を締め付けられる思いで、今日も僕は、ハンカチと共に舞う。

少年ウサギ・それに

世の中は常に騒がしい。

いつも通りアイロン掛けしたハンカチを胸ポケットにしまって、一歩うちを出た途端、そんなことを思った。

「お前の美形面に腹が立つんじゃ！」

「立つんじゃ！って言われても…って、イタツ。」

斜め向かいの玄関先で、ニコチン中毒女：基い、ヒナコさんが、既に何人かさえわかりかねる美形、ルビーさんを足蹴にしていた。

「イタツとか可愛い子ぶってんな！男の癖に！男で美形で外人さんか！？え、このやる！」

「痛いよヒナコさん…男で美形で外人って俺の所為じゃないし…。」

最もな台詞を吐いたルビーさんに、心中密かに頷いて同情した。

けれど、”渡辺ヒナコ”は大和民族まるわかりな名前だとしても”

車谷ルビー”ではそう言われても仕方ない気がしなくもない。

そう言う僕も”田中ウサギ”だからか、ヒナコさんには目を付けられている。

至極、迷惑極まりない話だ。

「…早々に立ち去ろう。」

小さく呟いて、しかし、学校へ行くためには通らざるを得ないそこを足早に見てみぬ振りでもやり過ぎそうとした。

が。

「天誅、ハンカチ少年！」

あられもない台詞と共に、ドロップキックが跳んできた。ひらりと躲し、颯爽とハンカチを取り出す。

「ヒナコさんも懲りないですね。」

「何をう！？やるか、ハンカチ！」

「望むところです。」

「え、ヒナコさん、俺は？」

「黙っとけ美形！」

「いつも思うけど…ヒナコさんのそれ、誉めてるの？」

がつつと小気味よい音がして、ヒナコさんの踵落としがルビーさんに綺麗に決まった。

「いざ、尋常に勝負！」

地を蹴るヒナコさん。

揺らめくは、くわえ煙草の煙とハンカチ。

そんな僕の、いつもの朝。

少年ウサギ・そのさん

僕のハンカチーフが盗まれた。

大変困ったことだが、困ったことはこれだけでなく。

「…あの人だな。」

犯人の目星がいと容易く付いてしまうことだった。

面倒だとは思えど、あれは代々田中家に伝わり祖父から受け継いだ由緒正しき赤いハンカチーフ。

このままにしておく訳にはいかないし、このままにしておいたとしても、どうせあの方はドアを蹴倒し、喚き散らしながらうちに来て来るだろう。

7

「何て面倒くさい人なんだ。」

そう呟いてから、僕は溜め息混じりに斜め向かいのあの方の家へと足を運んだ。

「あれーどうしたのさハンカチ少年。」

控えめにノックをしてドアを開ければ、くわえ煙草で面倒くさい人

ヒナコさんが、やる気なくソファにだらけながらそう言った。

「相変わらずニコチン中毒ですね。」

「お前は人んち来て第一声がそれか。」

最もなコメントは敢えてスルーする。

「あれを返してくださいませんか。」

「あれ？どれ？」

「そんなすつとぼけたボケはいりません。」

「ボケてねえよ！あたしはまだまだピツチピチだ！」

毎度のことながら、どうも話が噛み合わない。

ヒナコさんの脳細胞は、果たしてちゃんと機能しているのだろうか。余計なお世話かもしれないが、生活費はどこから出しているのだろうか。

そう言えば、ヒナコさんは働いているのだろうか。

「あんだ、一体何しにきたってのよ。」

だらだらしながらだらだら話すヒナコさんを一瞥して、「こんなどうしようもない人間を雇うお人好しがこの世にいるのだろうかと、どうでもいいことを考えてしまった。」

「あの、生活費は一体どこから…」

思わず口から思考が漏れたとき。

「あ、ウーちゃんじゃないかー。どうしたの？」

「ウーちゃんはやめてください。ていうか、またいたんですかルビーさん。」

ヒナコさんのパシリとしての人生に疑問を持っていないだろうルビーさんが、キッチンからひょいと現れた。

「ウーちゃんも食べる？今日のお昼はチャーハンだよー。」

「チャーハンはどうでも…あ。」

「あ？」

フリフリのエプロンを身に付けたやたらと美形な彼が布巾代わりに

手を拭いているそれ。

真っ赤で高貴さを漂わすそれは。

「…貴方でしたか。」

「チャーハンは？」

「…いただきます。」

僕のハンカチで手を拭く満面笑顔のルビーさんに、それ以上は、何も言うことが出来なかった。

「あんた昼飯ばかりに来たのかよ。」

「結果的にそうなったままでですが。」

後日。

ルビーさん宅の物干しにはためくそれを、そっと取りに行ったことは言うまでもない。

「ルビーさんには…言えないな。」

彼の憂うつべく人生とこれからを考えながら、只、遠い目でそう呟いた。

ピリカニズム 単位は"・柱"・です

「今日もいい天気だ。」

煎れたての緑茶片手に、うーんと伸びをして、澄んだ青空に目を細めた。

うんうん、とても清々しく素敵な朝だと思う。

大満足。

ちーちゃん（彼女）は今頃、ラクダに跨がって悠々と出勤中なんだろうなあとか、これまた清々しく、頬を緩めて考えてたりした。

僕はピリカ・ココ・町村。

オレンジの髪にグレーの瞳をしていて、自分でも正直、何人なのかは既にわからない。

町外れのこの村で、占い師をやっていたりする。

最近の僕の興味は、お隣に住んでる眼鏡少年と、斜め向かいのニコチン中毒な彼女と、そのお隣の少しMっ気があると思われる美形な彼だ。

「ヒナコさん。」

朝っぱらから堂々とニコチン中毒な彼女、渡辺ヒナコさん宅に了承なく乗り込んでいくMな彼、車谷ルビーくんの姿が見えた。

ああ、毎度のこととは言え、僕はわくわく…いや、はらはらしてしまっ。

「ルビーてめ！あたしはまだ寝てたんだよ！」

「イタツ！…酷いよ、ヒナコさん…。」

外にまで響き渡るガシャーンっという音と、打たれ強いのかあんまりこたえてなさそうなルビーくんのちよっと気の抜けた声。

「今日も平和だなあ。」

呟いて緑茶を見れば、茶柱が立っていた。

「柱って、神様を数える単位だね。」

てことは、僕の緑茶に一柱。
神様が降りたってことで。

「いいことあるかなあ、ちーちゃん。」

「え、僕は田中ウサギですけど。」

ちょうど前を通り掛かったお隣さんに、怪訝な顔でそう言われてしまった。

忙しいんです。

大学事務つてのはまあ、意外や意外、忙しいものでして。休講のお知らせを出してみたり、警告書を発行してみたり、経理のお手伝いしてみたり、ときにはお茶出ししてみたり。

「あかりさん。」

ああ、忙しい忙しい。

「ねえ、あかりさんってば。」

忙しい忙しい、忙しいったらない。

「あかりさんってーばー、もう。」

「忙しいっつってんじゃ！クソガキが！」

にっこにっここと笑顔を浮かべ、ついでにキラキラエフェクトで眩しさを撒き散らす男に、罵声を投げつけてやった。

どうだ、参ったかこの野郎！

「忙しいっつってんじゃ！って…今、初めて聞いたけど？」

「モノローグで散々言っただよ！」

わかれよ、そのくらい！

わかって、わかってよ、お願いだから！

あたしは今、仕事なんですよ？

お気楽極楽大学生に構ってやってる暇はないんですよ。

だってあたしは、社会人だから！

「そんな訳で、早く講義に戻りなさい。」

最もらしい理由で、スマートに追い返すあたし。

流石は社会人！

学生さんとは訳が違っつてね！

「でも俺、今は空きなんだ！」

何ですと？

「ほら、”倫理学休講”ね？」

携帯を突き出して今日の休講予定をあたしに見せてくるこいつ。

あ、クソ、マジだ。

毎日毎日飽きもせず事務室に通ってくるこの男、顔がよければ頭もいい。

ついでに、体もよければ人当たりもいいっていうね。

久留米航太、二十二歳。

またの名を『イラつくほどの美人』。

…カッコいいとかじゃない、男前とかでもない。

男なのに『美人』なのだ。

神様、不公平じゃあないでしょうかね？

「だからさ、あかりさんもうすぐお昼でしょ？一緒に食べようよ。」

ね？と上目遣いでおねだり攻撃を仕掛けてくる。

ヤメロ！

マジで！

そのエフェクトは外せんのか！

「ああ、いいですよ真壁さん。久留米くんも待ってるみたいですし

ね。」

ああ事務長（男）！

何、エフェクトと顔にほだされてんですか！

「やったー！ありがとうございます、事務長さん。」

にっこりと事務長に笑顔を向けた航太を見て、ほづ…と感嘆を漏らすその他大勢。

ちよつとちよつと！

あたしはこいつのせいで、仕事が進まないんだってば！

「いえ、遠慮し…ああああ、遠慮するつつってんじゃんかああああ…」

「行こう行こう、あかりさん。」

あたしの言葉は誰に聞き入れられることなく、半ば引き摺られるように、航太によって連れ出された。

この、クソガキヤー！

ああ、周りの同僚達の温い視線が痛い…。

「何食べたい？」

「…何でも。」

「じゃあ、俺あかりさんを…」

「却下じゃバカたれが！」

「どうでもいいけど、あかりさんて言葉おかしいときあるよねー。」

「…うるさいわ！」

真壁あかり、二十六歳。
とある大学事務員です。

何故か毎日『美人』がやってきては、仕事を妨害していきます。

神様、人に二物以上をお与えになるのは、やめた方がいいと思います。

大事なんです。

カタカタとパソコン画面に向かうあたしの顔は、きつと、出来る女
そのものに違いない。

違いない！

そうに違いないわ！

「真壁くん、その…」

「何ですか。」

おそろおそろといった感じで話し掛けてきた事務長に振り向きもせ
ず、手も止めず、短く応える。

今いいとこなんです。

邪魔ならしないでくださいませかね。

「それはその…いいのかね？」

「何がですか。」

「何って、その、うーん…。」

言葉を濁す事務長の言いたいことはわかる。

わかるけども。

今しかない！

今しかないんですよ！

わかってくださいよ、事務長！

「大丈夫です、今日の仕事は終わってますから。」

「そ、そうかね。それはいいんだけどね、真壁くん……。」

事務長うるさいな。

そう思って振り向こうとした、

そのとき。

「でもねーあかりさん。それ、個人情報だよ。」

のしつと背中に感じた重みと体温。

華奢に見えても、やっぱり男なんだなあとかうっかり思わせるそれ。

出た！

予定より早い！

「…離れてくれないかね、久留米くん。」

「久留米くんなんて、やだなー。航太って呼んでくれていいのに。」

「呼ばんわ！はーなーれーろー！」

事務長そっちのけでぎゃあぎゃああと藻掻くあたし。

久留米航太の腕はあたしの肩に回されたまま、それでも離れることはなかった。

「何でいるのさ！？今はまだ講義中な筈でしょうが！」

自由のきく右手で、ずばっとパソコン画面を指した。

そう。

あたしはこいつのしつっこいベタつきとお誘いから逃れるために、こいつのスケジュール一覧を作成してるところだったのだ。

「言っとくけど！データベースに侵入した訳でも、あんたの手帳盗んだ訳でもないかねー！」

尾行という正規の手段により手に入れた情報なんだから！
文句は言わせねえ！

「あ、そうか…なら、いいんだけどね。」

そんなことを漏らしてから事務長がほっとしてたけど。

今はそれどころじゃない。

腕を剥がすのに躍起になっていれば、むかつくほどに綺麗な笑顔で、むかつくほどに綺麗な指が、

ぱちつと、

パソコンの電源を、切った。

切った…

…切った？

「なああああつ！！！？！？」

「今の講義ね、小テスト終わったらあがりだったんだよね。」

「聞いてねえよ！」

そんなことは聞いてない！

あんた今、あんた今、何しやがったんだー！！！！！！

「さっき聞いたじゃん。」

「ああああ…あたしの、あたしの努力の結晶が…」

がつくりとうなだれたあたしの耳元で、むかつく美人が、甘く甘く囁きを零した。

「…そんなに俺のこと束縛したいの？」

ああ、神様。

「あ、あかりさんもう仕事終わったんでしょ？ご飯でも食べに行こう。」

どうしてこんな。

「それからさ、あかりさんのこと食べてー…」

「いい訳あるかー！…！…！…」

アップパーカットを繰り出すも、難なくそれは躲されて。

「さあ行こう！すぐ行こう！」

「やだああああ！」

またもや引きずられるように荷物ごと抱えられたあたしが、奴から逃げ切れたのは。

結局、ご飯を食べた後だった。

「可愛いなー、あかりさんってば。」

走って逃げたあたしは、奴がそう言ってくすくす笑っていたことなんて、もちろん知らない。

喜んだんです。

さてさて。

大学はもうすぐ夏期休暇、いわゆる夏休みに入る訳で。

「嬉しい！嬉しい！ちょお嬉しいです事務長！」

「そ、そうかね。」

若干引き気味の事務長相手に、あたしは、ガッツポーズでそう宣っていた。

そうは言っても。

あたし達は二ヶ月近く丸々休みがある訳じゃない。

後期からの講義申請やその他に備えて、それなりに仕事はあったりする。

あ、講堂の掃除の手配しとかなきゃな。

夏期の資格講座のスケジュールも作っておかないと。

ある意味、いろいろなことに追い込み作業はあるものの、それでも緩む口元は隠せなかった。
何故ならば。

「あっかりさーん。」

ばたーんつと事務室のドアを勢いよく開けて乗り込んできた美人が、あたしの元へと、一直線に駆けてくる。

だって、

だって、

夏休みとなれば。

「こいつがいないんですよ、事務長!」

「ああ、そういうこと。」

聞いてもない事務長に笑顔満面でそう言えば、納得したのか、事務長は苦笑でそう返した。

「何の話?」

「うふふふ。」

「気持ち悪いよ、あかりさん。」

うっさいわ!

何とでも言つがよろしい!

今日のあたしは挫けない!

強い子元気な真壁あかりですから!

「強い子元気って。」

「モノローグ読まれたって平気だもんね！」

「それ、グリコだよね？」

「ちょっと聞いてんの？」

がっとなの襟首を掴んでがっくんがっくん揺らしてやる。
教えてやる、教えてやるともこの朗報を！

「もうすぐ！夏休みだから！あんたと！会わんで！済むんだ！ヤッ
ホー！」

「テンション高いねー、あかりさん。」

天高く拳を突き上げたあたしと、揺さ振られながらもここにこして
るこいつ。
どちらにかは知らないが、微妙に温い視線が、間違いなく注がれて
いた。

「けどねーあかりさん。」

このときのあたしは。

「盛り上がっていると悪いけど、」

まだ、

「…何よ？」

まだ、

「…言いにくいんだがね、真壁くん。」

「…何ですか事務長。」

まだ、知らなかった。

明後日の方向を向いた事務長が、申し訳なさに告げた真実を。

「実はその…久留米くんのところのサークルがね、夏休みに旅行に行くんだが…。」

「行けばいいじゃないですか。」

「あかりさんも行くんだよ。」

…はい？

え、何で？

奴の襟首をひっ掴んだまま、ぼかーんと事務長を見詰めること数秒。

「大学の宿舎の食堂係が辞めちゃってね、学長がよろしく頼むって
うちに言ってきたんだが…」

つまり。

そうは言われても、事務室職員は皆既婚者で。

スケジュールの都合上、たまたま空いてたあたしに白羽の矢が立っ
ちやった訳で。

しかも。

そのサークルとやらにこいつがうっかりいたりしちゃった訳で。

「……………マジでか。」

「マジだよ。」

「…すまんね。」

明後日に向けたままの事務長のつるつばげに目を細め、あたしは密

かに、涙を飲んだ。

「楽しみだよねー。」

「…そうだね…。」

がくりとうなだれたあたしの横は、対照的にキラキラエフェクトで眩しく。

また、涙が出た。

お母さん！

あなたの娘は、何だか泥沼ですよー！

御免なんです。

青い海、白い雲、眩しい太陽に…

「……はあ。」

溜め息混じりなあたし。

そう、来てしまいました。

むかつくほどの美人率いる『恐怖の夏合宿』に！

ああ、日差しに倒れてしまいたい。

そして救急車で運ばれて、熱中症だからすぐ帰宅しなさいとかドクターストップ掛かって、わだかまりもないままに『それじゃあ仕方ないよね』的な空気で意気揚々とこの場を去れるのに！

「まだそんなこと言ってるの、あかりさん。」

出た。

「言ってますせんが。」

「モノローグで。」

だから、お前はエスパーか。

「毎回読まないでよ、プライバシー侵害しまくりだよそれ。」

「ただ漏れなんだもん。」

につこにつここと相変わらずなエフェクトを飛ばすは、事の元凶、久留米航太。

あたしは極力関わりたくないから自力で行くと言ったのに、無理矢理サークルメンバーの車に押し込まれた拳げ句、ちゃっかり隣に座りやがって、根掘り葉掘り根掘り葉掘り…

「お前は何なんだ！」

「まあまあ。」

何がまあまあのなか！

何が！！！！！！

いっそのこと、こいつのエフェクトで倒れたらいいのに、あたし。

「……はあ。」

「溜め息吐くとしあわせ逃げるよ。」

「…もう逃げてる。」

あなたの所為で。

見上げた空はやっぱり青く、少しだけ、これからに涙した。

「何あいつ。」

「航太にべたべたしちやって。」

冷たい視線と大いなる誤解には、まだ、気付くことなく。

500万が498万になっちゃいけないの？(前書き)

会話の応酬だらけです。

文とは言えない小話シリーズ。

500万が498万になっちゃいけないの？

だいちゃん「500万かーどうすっかなー」

ヒロシ「あ、だいちゃん！」

だ「おーヒロシ、お前何やってんの？」

ヒ「生きてんの」

だ「知ってるから。そうじゃなくて。……働いてんの？」

ヒ「働いてるよーバイトで！」

だ「バイトって」

ヒ「結構きつんですけど」

だ「月いくら？」

ヒ「5万！」

だ「5万て（・・）」

ヒ「結構大変なんだぜー時給850円だしさー」

だ「850円て（・・）」

高校生並みの時給なヒロシ。

だ「……いくらかやるつか？（ちょっと可哀相になった）」

ヒ「え、何で何で何で!？」

だ「いや何かさ、急に仕事（だいちゃんは大學生でIT系の仕事も自分でやってる）で儲かっちゃって、500万あるんだ」

だいちゃんはいい人。

ヒ「えーいいよ……悪いじゃん」

でも期待するヒロシ。

だ「んー（あんましやつてもこいつのためになんないか？）……取り敢えず2万でい？」

ヒ「2万!？」

だ「うん」

ヒ「500万から2万もやっちゃったたら498万になっちゃっうじや

ん！何かキリ悪いけどいいの！？」

でも貰うヒロシ。

だ「貰うのかよ」

ヒ「わー2万も貰っちゃった……わー」

だ「足しにしろよ（生活費の）」

ヒロシは実家住まい。

ヒ「うん！ジ　リ展行くね！」

だ「だから、生活費の足しにしろって」

ヒ「お土産はジジのぬいぐるみでいい？」

聞いてないヒロシ。

だ「いやだから……。てか、お前どっでバイトしてんの？」

ヒ「デイリーヤマ　キ」

今どきなかなか見ない。

(ある意味レア)

ヒ「もうすぐ春だからさー楽しみいっぱいだなー」

だ「楽しみ?.....まあ、いいけど。ちゃんと(生活費の)足しにするよ」

だから、ヒロシは実家住まい。

しばらくして。

だいちゃんの友人「あ、だー!」

だ「おう、どした?」

友人「この間さ、ジリ展でヒロシ見たぜ。ジジのぬいぐるみ買ってたけど」

だ「.....」

ヤマ キも春です。

だいちゃん「もうすっかり春だなー」

ヒロシ「あ、だいちゃん！」

だ「おーヒロシ。どこ行くの」

ヒ「バイト先！」

だ「バイトじゃなくて？」

ヒ「バイトは終わって帰って来たんだけど、超重要なもの忘れたの！」

だ「超重要なもの？」

ヒ「バイト先結構かかるんだけどさーやっぱ、超重要なものだからー」

だ「だからそれ何だよ」

ヒ「春のパン祭りでしょ？」

だ「『でしょ？』って言われても」

確かに。

ヒ「だーかーらー！まっつん（松た 子のことらしい）が毎年CMしてんじゃん！春のパン祭りだよ！」

だ「（ああ、あれね）……それがどうしたんだよ。ああ、バイト先デイリーヤマ キだっけ？フェアだから何か頼まれたとか？（何だ、ちゃんと仕事やってんのか……）」

ちよつとヒロシを見直すだいちちゃん。

が。

ヒ「違うよ！だいちちゃん「違うのかよ！」俺あれ集めてんの！ポイントシール貼った紙、バイト先に忘れちゃったの！」

ヒロシ大慌て。

だ「ポイントって……わざわざ買ってんの？（食パンを？）」

ヒ「前にさーバイト中シールはがして貼ってんの店長にはれちゃって。怒られたー」

だ「はがすなよ」

それは怒られる。

ヒ「あ、急がないとだった!」

だ「そんな慌でなくても。明日でもいいじゃん、もう暗いぜ」

ヒロシのバイトは主に日中。

(朝は起きられない)

ヒ「だめだよ!夜バイトのゆうくんも集めてんの!取られたら大変だもん!」

だ「誰だよゆうくんて」

確かに。

ヒ「ゆうくんはゆうくんだよ!春のパン祭りは危険(?)がいつぱいなんだよ!」

だ「危険が?春のパン祭りに?ヤマ キ春のパン祭りに?」

ヒ「じゃーねー!急がないと、バイト先まで30分かーかーるーかーらー!」

だ「遠つ (。(」

だいちゃんに見送られて、ヒロシは自転車で颯爽と去っていった。

だ「……春だなあ」

春ですね。

おばさん、それはまずいんですよ

道でばったり。

？「あらーだいちゃんじゃない！久しぶりねー！」

だいちゃん「あ、ヒロシのおばさん。お久しぶりです」

まさかのヒロシ母登場。

だ「ヒロシは？」

ヒ母「バイトよバイト！デイリーヤマ キー！」

だ「（まだやってるんだ）……頑張ってますね」

ヒ母「もうねーいい歳してぶらぶらしてーまいったやうわー！（その割りに明るい）」

ヒロシ母は根明。

（ヒロシとある意味そっくり）

ヒ母「あ、ちょっと待って、待っててだいちゃん！」

だ「はあ……」

待つこと30分。

ヒ母「待ったー!？」

だ「はあ、まあ、だいぶ」

ヒロシと激似な母。

だ「まあいいですけど(慣れてる)何持ってきたんですか？」

ヒ母「これねーだいちゃんにあげるわーうち、いっぱいあってねー
」!

だ「おばさん声でかいっすね」

ヒ母「やあだあーだいちゃんてば!おばさん照れちゃっわー! (?)
」

だ「そうっすか(やっぱり慣れてる)」

ヒ母「はいっ!」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるボウルだけど」

だ「えっ (・・)」

これが噂のと思っただいちゃん。

だ「い、いいんですか？確か、ヒロシがすっごい集めてるって……
(てか、いらぬい……)」

ヒ母「いーいーのーよー！あの子毎年毎年貰ってきて、うちいっば
いあるんだから！」

だ「いっばいって……」

ヒ母「50枚くらい？」

だ「あり過ぎ (・・)」

ヒ母「でっしょー？貰って貰って！だいちゃんほら、一人暮らしだ
って聞いたしね！」

春のパン祭りボウルが、何かの足しになるのかは謎。

ヒ母「ね？」

だ「は、はあ……」

だいちゃん、押しに負ける。

しばらくして。

ヒロシ「はあ……」

だ「よう、ヒロシ。……どうした？元気ないな（バイトくびになっ
たとか？）」

憔悴のヒロシ。

ヒ「実はさ、3年前の春のパン祭りでまっつん（松た子）がC
Mで使ってたのと同じ型のポウルが、どっかいつちやって……はあ

だ「もっと別のことで落ち込めよ」

ヒ「だってだって！あれ、シール30枚必要でさーなかなか貯まら
なくて俺、かなり苦戦したのにさー……はあ」

ため息が止まらないヒロシ。

だ「そのポウルだって、きつとどっかにあ……（・）（・）」

回想

ヒ母「はいっ！」

だ「これは……」

ヒ母「ヤマ キ春のパン祭りで貰えるポウルだけど」

回想終了

だ「あれか」

ヒ「え？」

だ「いや、何でもない何でも」

ヒ「そう？じゃあ俺、バイト行くから……はあ」

心なしか、自転車もゆっくりなヒロシ。
それを見送るだいちゃん。

だ「やばいな、ヒロシの憔悴ぶり、尋常じゃな……」

ヒ母「あらーだいちゃん!」

だ「あ、おばさん!あの、この間のボウルなんですけど、」

ヒ母「あらー気に入ってくれたー!?じゃ、ちよつと待ってて!また持つてくるか「それはまずいんですよ」「……何で?(きよとん)」

だ「何ででもです。ヒロシが激痩せします」

ヒ母「やあだーだいちゃんてば超 意味わっかんない!」

だ「おばさん、若いのはいいんですがとにかく春のパン祭りシリーズはだめです。門外不出でお願いします」

ヒ母「えー」

だ「えーじゃないです」

ヒ母「50枚あるのに?」

だ「あり過ぎですがだめです」

ヒ母「えー」

えーと言いたいヒロシ母の気持ちもわかる。

後日、だいちゃんはそのつとヒロシ母に3年前の春のパン祭りでもっつんがCMで使ってたというポウルを返却。

ヒロシは、

ヒ「あ、だいちゃんーん！」

だ「ヒロシ……（絶句）」

ヒ「あ、ばれたー？悩みがなくなってね、そしたらたくさん食べちゃってー」

太っていた。

マヨネーズラー（前書き）

所謂マヨラー！。

マヨネーズラー

だいちゃん「あつついなー」

ちりりんっ。

ヒロシ「あ、だいちゃん！」

だ「おう、ヒロシ……うわあ痩せる気ねー」

ヒ「ぢゅ　　っ、え？」

だ「え？じゃないえ？じゃ。それはない」

マヨネーズ片手に登場のヒロシ。
どどん肥えている。

だ「お前さ……夏バテとかないの？（なさそうだけど）」

ヒ「ない。」

だ「やっぱりないんだ……」

妙に納得。

しかも、自転車の前カゴにはマヨネーズ常備（未開封）。

だ「悪くなりそうだな」……で、どこ行くの？」

ヒ「バイト！」

だ「マヨネーズ乗せて！？（・・）」

遂に奇行に走ったヒロシを心配そうに見つめるだいちゃん。
それは常であるとまだ認めたくないだいちゃん。

だ「おい、お前……」

ヒ「あ、やっぱーい！急がないとバイト遅れちゃうから！」

だ「あ、おい、」

ヒ「いっぱいあるから、だいちゃんにもあげるね！」

（未開封）マヨネーズを手渡されるだいちゃん。

だ「い、いらな、」

ヒ「夜バイトのゆうくと流行ってんの！ぢゅ

っーじゃ

あねー！
」

颯爽と、しかし、心なしか前よりはあはあ言いながら去っていくと
ロシを見送りながら。

だ「…マヨネーズ嫌いなのに」

（未開封）マヨネーズに、うっかり本音を零しただいちゃんでした。

そしてヒロシは。

ヒ「最近体が重いなー」

気づいていなかった。

ある日、洗濯機の中に腕が一本落ちていた。

「珍しいこともあるもんだ」

くわえ煙草でそう言ったあたしに、遊びに来ていた後輩の深雪が「何かありましたか」と顔を覗かせた。

「前に蛙が干からびてたことはあったんだけど」

「蛙ですか」

「うん蛙」

荻窪にも蛙がいるもんなのかと、そのときは感心したものだが。

「で、今回は何がいたんですか？」

「腕が」

「はい？」

「腕があつた」

「まつさかー」とけらけら笑う深雪に、「だよねー」と笑って、一回、洗濯機をばたんと閉めた。また開けた。

「やっぱりあるんだけど」

「蛙が？」

「いや、腕が」

どうしたもんか、これはまいった。

誰の腕かは知らないが、取り敢えず、あたしんちの洗濯機の中にあるのは困る。

やはり、都会とは物騒なんだろうか。

「ねー深雪」

「何ですか」

「腕って生ゴミであってる？」

「粗大ゴミじゃないことは確かですけど」

「肘下なら粗大じゃないよね」

「そうですねー」と相槌を打った深雪が、ビールを取りに冷蔵庫を開けた。

「先輩」

「ん？」

「粗大かも」

くわえ煙草で顔だけを部屋に戻したなら、冷蔵庫から顔を出した深雪と目が合う。

「ビールじゃなくて、肘上が冷やされてます」

「やだ、肩下ってこと？」

「はい」

昨日の昼間に冷やしておいた筈のビールは、一体どこへ行ったのか。

「じゃあ粗大かなあ」

「分割されてるから、やっぱり生ゴミでいいんじゃないですかね」

「あんたが粗大かもって」

「やっぱり生ゴミですよ」

ビニール袋にそれを詰め込む深雪に、「あ、これも」と洗濯機の中の腕も渡した。

何となく考えていたことを深雪に聞いてみた。

「二十五過ぎると妖精になれるんだって」

「何の話ですか」

「処女の話」

「処女なんですか」と聞かれて「違うけど」と答えた。

処女じゃないけどセカンドに突入してだいぶ経つ。

妖精にはなれなくても、穴は塞がるんじゃないだろうか。

いや、処女膜が再生しないことくらい、あたしだって知ってるけども。

「ちなみに男だと何になれるんですか」

「魔法使いだって」

「魔法使いの方が格上じゃないですか」

確かに、妖精は魔法使いが連れてるイメージがある。

あんまり、魔法使いが妖精に連れられているイメージはないかもしれない。

こんなところでまさかの男女差別だろうか。

いや、格差？

これが男女の格差なのか。

「根本から正していかないとね、やっぱりなくならないものかね」

「何の話ですか」

「格差の話」

「魔法使いの話だったんじゃないんですか」

「まあね」と答えてから、煙草に火を点けた。
ああ美味しい、煙草が美味しい、人生は最高だ。

「いやはや、素晴らしい」

「魔法使いが？」

「いや、人生が」

「妖精の話はどうしたんですか」

深雪もまた煙草に火を点けたところで、妖精になった自分を考えてみた。

「気持ち悪い」

「まあ、気持ち悪いですよね」

メルヘンは似合わない。

ファンタジーも似合わない。

人生は素晴らしい、が、人生とは現実だ。

「これ、どうすんの」

「見ないで返却も癪ですけどね」

レジで誤って誰かのものを入れ替わったらしいレンタルDVDに、溜め息が出て煙が揺れた。

「『Dカップハイスクール』って」

「『にゃんにゃん言わせて』って」

「まんまじゃねえかよ」

登場する方々について、ある意味誰かの妖精なんだろうとか、そ

んなことを考えてから。

あたしはやっぱり、妖精より魔法使いの方がいいよと言ってみた。

「穴が塞がらない魔法とか使えるんですかね」

「カビが生えない魔法とかね」

さて、このDVDをどうしようか。

アパートでぐだぐだしていれば、呼び鈴さえ鳴らさずに深雪が入ってきた。

「ただいまです」

「何あんた、ここに住んでんの」

「そんなもんですね」

手にはしっかりと合鍵が握られていた。

いつ作っただとか、もう面倒でどうでもいい。

「さ、芋育てますよ先輩」

「芋？」

「家庭菜園キット買ってきたんです」

よいしょつとあたしの目の前にそれを置いて、やる気満々に腕まくりをした深雪を見上げた。

芋だろうがトマトだろうがどっちだっていいけども。

「うちで育てんの？」

「他にどこで育てんですか？」

「あんたたちでやれば」

「うち引き払ってだいぶ経ちますよ」

「あ、そうなの」

ずいぶんとうちに居座るなと思ってたけど、何だ、もう住み込んでたのか。

「て、おかしくね？」

「まあまあ」

「もしかして体狙い？」

「先輩がDカップだったらそうかもしれませんけどね」

失礼な。

「Aだって需要あるよ」

「あるんですか」

「ないこたあないって程度？」

「聞かないでくださいよ」

あたしにもわからん、と言ったなら、人間体じゃないです顔ですと、
実も蓋もない答えが返ってきた。

どっちもどっちなあたしは、じゃあ、何で勝負に出たらいいんだろ
うか。

「だから家庭菜園ですよ」

そうなのか。

「ベランダ遊ばせてるのはもったいないですよ」

「で、芋？」

「秋ですから」

「メロンがいい」

「それ夏ですから」

そうは言っけども。

「今から育てんだよね？」

「はい」

何か？みたいに首を傾げた深雪は、どうやらおつむが足りないを見た。

「今から育てたって今秋中には食べないじゃん」

「あ、」

『いーしゃーきいもっ、焼き芋ー』

沈黙の中、お馴染みのメロディがアパート下を通った。

「……買いに行きませんか？」

「屁こかないですよ」

「先輩こそ」

家庭菜園キットは、間違いなくお蔵入りだと思った。

4 (前書き)

主催の短編投稿企画『酸欠』投稿作品を転載。
企画テーマは『調味料』テーマは『味噌』でした。

今日も荻窪は晴れていた。

「味噌食べたくなる空じゃないですか？」

「青いのに？」

「青は味噌ですよ」

そもそもが味噌食べたくなる空つてのがよくわからないが、深雪は味噌を食べたいらしい。

てか、味噌食べたいって何だ。

窓から覗く空は青い。

そして、冷蔵庫をがさがさと漁った深雪を視界の端に捉えていれば「じゃーん、味噌です」とか言って、本当に味噌達が登場を果たした。

「味噌『達』ね」

「味噌です」

「複数系でしょ、てか何で味噌がそんなに」

いつの間にか同居人と化していた深雪は、いつの間にか冷蔵庫を掌握していた。

そして、いつの間にか味噌コレクションをしていたらしい。

「で、何作ってくれんの」

「食べ比べじゃだめですか」

「味噌の？」

「味噌の」

何で味噌だけなのと聞いたら、味噌って高いんですよと当然に返される。

つまり、

「味噌に食費をはたいたわけね」

「だって味噌ですよ」

「そりゃ味噌だけでも」

調味料として活躍してこそその味噌だとは思うが、しかし、空の青に立ち向かわんばかりのそれらは、深雪の前で堂々として見えた。

たかが味噌なのに。

しかしながら、これだけの味噌ならば、深雪がその頭上に掲げる味噌より内容は濃いことだろう。

「人生って深いね」

「何の話ですか」

「味噌の話」

「ニュアンスが……」

「味噌の話だよ」

言い切る。

「腹減ってきたじゃんか」

「味噌がありますって」

あんたにもあればよかったのに。

そうは言わずに食べた白味噌は、思ったよりも濃厚だった。

「甘く見てた」

「意外と濃厚じゃないですか？」

「あんたと違う」

「だから、何の……」

「味噌の話だよ」

絶対違うと首を捻る深雪と味噌を見比べて、食べた白味噌は、何と驚きの八百九十円だった。

「高い！」

「白味噌バカに出来ないのでから」

「あんたと違う」

「だから何が……」

さて、明日からの飯をどうしようか。

「食事に誘われた」

「快拳ですネ」

「……もつと何かさあ、盛り上がってみてよ」

「快拳としか言えません」

一応うだうだと続けている会社の後輩に、何とまあ、今度食事に誘われた。

うきうきはしない。

何故なら、あたしは年上好きだ。

「が、しかしだ」

ぐ、と握り拳のあたしの横で、深雪はどうしてもよさそうに耳掻きをしていた。

本当にどうでもいいらしい。

「三年ぶりのときめき珍事なわけ！もうこれは、食っちゃうしかないわけ！」

「いきなりジャンプですネー」

「ホップもステップも踏んでらんない」

順番なんぞ気にしていたら、永遠にステップ止まりな気がする。永遠にステップって、どんなテンションだ。

「でも、見切り発車はよくないですよ」

「遅いよりよくない？」

「何の話ですか」

「発射の」

「発車の？」

「致してる最中の方……あ、終わりかな？」

言つて空しくなったのは勘違いであつて欲しい。

発射とかフィニッシュとか、どんだけ飢えてんだつて話だ。

「あたしは飢えてない」

「覆しましたね」

「飢えてるつちゃ飢えてるけど」

「どっちですか」

耳搔きを終えた深雪が、冷蔵庫をがさがさと漁り出した。

「味噌しかないですねー」

「ないよ」

「お腹空きました」

「だから飢えてるつて言つたじゃん」と言えば、「ああ……」と遠い目で答えられた。

「後輩に米貰つてきてください」

「その手があつたね」

「使えるもん使わないと飢えが満たされません」

「味噌お握りが作れるね」

性欲より食欲。

男じゃ満たされないと悟つた、荻窪アパート一室のあたし達だった。

後日、飢えが限界の深雪も連れて後輩との食事に行けば、ジャンプ

したのは深雪の方だった。

「見切り発射でした」

「あんたもね」

あな恐ろしきは美貌の彼女。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180z/>

妄想ウサギSIDE

2011年12月1日01時46分発行